

# 主節部に単純現在形が現れるIt turns out that節構文に関する記述的研究\*

大竹 芳夫

## 0. はじめに

ものごとの真相や事実の判明が伝えられるとき、どのような言語形式で表現されるのであろうか。本研究では、先行文脈や話題中のことがらの真相や結末といった容易には知りがたい事実が判明したことを告げ知らせる英語構文について、判明時が過去であるにもかかわらず単純現在形がしばしば使用されるメカニズムの解明を試みる。大竹 (2013) では、“turn out” 節を含む (1)-(2) のような構文を分析し、その基本的意味は、先行文脈や話題中のことがらの実情、真相、事実、帰結、結末といった容易には知りがたい事実が調査や研究などの経緯や一定の時間を経て明らかになったことを伝えることであると論じた。以下、用例中の下線および波線表示は筆者による。

- (1) Jeremy Hunt should have been standing up for the interests of the British people. In fact it now turns out he was standing up for the interests of the Murdochs. (*The Independent*, 2012/4/25: 大竹 (2013))  
(Jeremy Huntはイギリス国民の利益を守っていたはずだった。ところが実は、Murdoch家の利益を守っていたことが今になって判明したのだ。)
- (2) a. At first glance the customer believes he or she is buying an inexpensive printer. In the end it turns out that the total costs per printed page are anything but cheap.  
(J, Rost, *The Insider's Guide to Outsourcing Risks and Rewards*: 大竹 (2013))  
(一見、客は自分が安いプリンターを買っていると思っている。しかし結局は、1 ページを印刷するのにかかる合計費用は決して安くはないということがわかったのだ。)
- b. [記事冒頭の一文] And so, in the end, it turns out moving California's presidential primary up into early February was a good thing for the state. (*The Daily Transcript*, 2008/2/29)  
(やはり、結局、カリフォルニア州の大統領予備選挙を2月上旬に変更したことは州にとってはよかったということがわかったのだ。)

(1) では、先行文脈や話題中のことがらの実情や真相の披瀝を伝達する談話標識 “in fact” (「ところが実は」) に導かれて、“turn out” 節を含む構文が発話されている。また、(2a-b) では、先行文脈や話題中のことがらの帰結や結末を合図する談話標識 “in the end” (「結局 (は)」) に導かれて、“turn out” 節を含む構文が発話されている。いずれも、

先行文脈や話題中のことがらの実情、真相、事実、帰結、結末といった容易には知りたがたい事実が判明したことを告げ知らせている。興味深いことに、下線部 (1)-(2) は「今になって～ということが判明した」、「結局～ということがわかった」といったように「判明」時が過去であるにもかかわらず、主節動詞には過去形ではなく単純現在形“turns”が使用されている。“turn out”節を含む上記のような構文の主語要素には“it”以外の要素が用いられる場合もあれば、主語要素自体が現れない場合もあることは、大竹 (2013) で指摘した。たとえば、(3a) の下線部の構文では語彙名詞句“the reason”が主語要素に用いられており、(3b) の“Turns out”から始まる構文では主語要素が表面に現れていない。

- (3) a. Because Furtwaengler was so talented, John Von Rhein laments that Furtwaengler never conducted the Chicago Symphony. The reason turns out to be that in 1949 the CSO board had to withdraw an offer to make Furtwaengler its musical director.

(*The Chicago Tribune*, 1986/2/12: 大竹 (2013))

(Furtwaenglerはとても有能だったので、シカゴ交響楽団の指揮を一度も振ったことがなかったことをJohn Von Rheinは悲しんだ。とうとうその理由が、1949年にシカゴ交響楽団委員会がFurtwaenglerを音楽監督にする申し入れを取り下げなければならなかったからだとわかったのだ。)

- b. Fidelity Investments released a study showing that mothers have far more substantive discussions about money than fathers do when talking about estate planning or wills, health and elder care topics, and the ability to cover living expenses in retirement. Turns out moms are also a little easier to talk to.

(*The Washington Post*, 2013/5/8)

(Fidelity Investments社は、資産計画、遺言、健康、介護といった話題や退職後の生活費をまかなう能力のことを相談するとき母親のほうが父親よりも金銭に関してずっと実質的な議論をするという研究論文を発表した。母親のほうが少し話しかけやすいということもわかったのだ。)

大竹 (2013) では、これらの構文をS+turn+out (+to+be+that) 節構文と呼び、主語要素Sの選択と出没に関して意味論的観点から分析を行うとともに、構文の基本的意味を説明した。本研究では、主語要素Sに“it”を選択する (1)-(2) のような構文をIt turns out that節構文と呼び、考察対象とする。実際の言語資料を観察しながら、過去の判明を表明するIt turns out that節構文の主節動詞“turn”にしばしば単純現在形が使用されるメカニズムを解明することが本研究の目的である。

## 1. 先行研究

It turns out that節構文は口語、文語の両談話で頻用され、前節の (1)-(2) が例示するように、判明時が過去であるにもかかわらず、主節動詞には過去形ではなく単純現在形“turns”がしばしば使用される点に特徴がある。しかしながら、大竹 (2013) で指摘した

ように、Quirk et al. (1985)、Declerck (1991)、Biber et al. (1999)、Huddleston and Pullum (2002)、Sinclair (2004)、Swan (2005)、安藤 (2005)、Carter and McCarthy (2006) といった従来の伝統的な記述文法書や語法書においては、その使用時制を含めて、統語的、意味的、機能的特性に関する詳しい説明は与えられてこなかった。また、“turn out”をイディオムとして記載する辞書においても、不十分な記述説明に留まっているように思われる。たとえば、*Collins COBUILD Advanced Dictionary*はIt turns out that節構文を [V-ed P that] と表記し、主節動詞“turn”の使用時制を過去時制として提示している。

- (4) **turn out:** If something turns out to be a particular thing, it is discovered to be that thing.

・ [V-ed P that] *It turned out that I knew the person who got shot.*

(*Collins COBUILD Advanced Dictionary*)

*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Eighth Editionもまた、(5)のように主節動詞“turn”が過去時制である用例のみを示すに留まっている。

- (5) **turn out:** 4 to be discovered to be; to prove to be:

[~ that ...] *It turned out that she was a friend of my sister.*

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Eighth Edition)

これら二つの辞書のように、It turns out that節構文の主節動詞“turn”の使用時制を過去時制として表記する辞書は少なくない。このような記述説明は、あたかも本構文で使用される主節動詞“turn”の時制が過去時制に限られるかのような誤解を与えてしまうであろう。It turns out that節構文は、本研究の諸例が例証するように、過去の判明を表すにもかかわらず、主節動詞“turn”にしばしば単純現在形が使用される点に特徴がある。

一方、It turns out that節構文の談話での使用実態を正しく反映して、主節動詞“turn”に単純現在形が用いられる用例を挙げる辞書がある。たとえば、*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, Third Editionは“turn out”の項に、主節動詞“turn”が単純現在形である“It turns out that she had known him when they were children.”(「子供のころ彼女は彼と知り合いだったということが今になってわかったのだ。’)という用例を提示している。

- (6) **turn out: HAPPEN**

• to be known or discovered finally and surprisingly

[+ that] *It turns out that she had known him when they were children.*

(*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, Third Edition)

わけでもIt turns out that節構文の使用時制に関して最も踏み込んだ記述説明を与えているのは『ウィズダム英和辞典』第3版である。

- (7) turn out: [～out (to be) C] <物・事が>結局Cになる；Cだとわかる, 判明する (Cは形名)

I thought I knew everything, and *it turned [turns] out (that)* I knew nothing at all. ≙ (話) ... everything. Turns out ...

私はわかっているつもりだったが結局何もわかっていなかった

((1) itはthat節をさす形式主語 (2) 現在形ではたった今わかったことを示す。その際 (話) ではitが省略されることがある)

(『ウィズダム英和辞典』第3版)

『ウィズダム英和辞典』第3版は、It turns out that節構文の主節動詞“turn”には過去形のみならず現在形も用いられるという事実を指摘し、「現在形ではたった今わかったことを示す」と説明を試みている。『ウィズダム英和辞典』第3版は、主節動詞“turn”に単純現在形が使用されるという実情を踏まえた指摘をしている点で評価できる。しかしながら、「現在形ではたった今わかったことを示す」とする説明記述には議論の余地がある。第一に、『ウィズダム英和辞典』第3版は記述内容を(7)の用例の訳出に反映しておらず、「たった今」という表現を厳密にはどのような意味で記載しているのかは不明瞭である。もし「たった今」を“just now”（「たった今／今しがた」）のような意味でIt turns out that節構文の説明に記載しているのであれば問題である。「たった今」といった、ごく近い過去を積極的に表すのであれば単純現在形ではなく、“just now”（「たった今／今しがた」）を付加した単純過去形“turned”、あるいは“just”を付加した単純過去形や現在完了形の形式が用いられるはずである。しかしながら、手元の資料にはそうした使用例は一例もない。第二に、本研究で詳述するように、It turns out that節構文の主節動詞“turn”が単純現在形で使用されるとき、「{たった今／今しがた} わかった」ではなく「{今になってようやく／今はじめて} わかった」といった、問題意識の発生から時間を隔てて判明に至った実情や帰結を発話時現在に新情報としてつまびらかにしている。上記の(7)の用例は(8)のような意味を伝達していると考えられる。

- (8) I thought I knew everything, and it turns out (that) I knew nothing at all.  
(自分は何でも知っていると思っていたが、実はまったく知らなかったということが {今になって／??たった今} わかったのだ。)

ここまで概観してきたように、実際の談話ではIt turns out that節構文の主節動詞“turn”に単純現在形が頻用されるにもかかわらず、その意味特性は十分に解明されてこなかったように思われる。

ものごとの真相や帰結の「判明」を披瀝する以上、その披瀝に先立って何らかの問題意識がもともと潜在することになる。結果として、判明を伝達するIt turns out that節構文には、問題意識の発生から事実の判明に至るまでの「時間の隔たり」が必然的に含意される。このことを裏付けるように、It turns out that節構文の主節動詞“turn”に単純現在形が用いられて過去の判明を伝達するとき、「時間の隔たり」を積極的に伝える副詞表現と共に起る事実が観察される。次例では、「今になって」という「時間の隔たり」の意味

を表す副詞 “now” がIt turns out that節構文に生起している。

- (9) a. When Nick first contacted me to solicit a weekly column, I was reluctant, wondering if I had enough ideas to produce a column a week. Now, nearly four years later, it turns out that he was right, and I did.

(G. Reynolds, *Army of Davids*)

(最初にNickが週間コラム欄への投稿を私に求めてきたとき、私は気が進まず、週に一度のコラムを書けるだけのアイデアがあるかどうかとっていました。4年近くたった今になってようやく、彼が正しかったことがわかり、実際に私は毎週コラムを実際に書けたのです。)

- b. There was a movie called “Enemy of the State” where you could follow a guy around based on something you attached to his car. It turns out, now in this age of GPS, this is a real issue.

(PBS “NEWSHOUR” のtranscript: 2011/10/3放送

[http://www.pbs.org/newshour/bb/law/july-dec11/scotus\\_10-03.html](http://www.pbs.org/newshour/bb/law/july-dec11/scotus_10-03.html))

(以前に「Enemy of the State」という映画があり、あなたがある男の車に取り付けたものを頼りにその男を追跡できるという場面がありました。全地球測位システムの時代である今になって、このことが現実問題であることがわかったのです。)

(9a) の “Now, nearly four years later, it turns out that he was right” は「4年近くたった今になってようやく、彼が正しかったことがわかったのです」という意味を、(9b) の “It turns out, now in this age of GPS, this is a real issue” は「全地球測位システムの時代である今になって、このことが現実問題であることがわかったのです」という意味を表している。いずれも、ある新事実が過去に判明したことが単純現在形 “turns” で表現され、「今になって」という「時間の隔たり」の意味を表す副詞 “now” が生起している。

本節で考察してきたように、It turns out that節構文の主節動詞 “turn” に単純現在形が用いられて過去の判明を披瀝する用例がしばしば観察される。その理由は、問題意識の発生から時を隔てて事実が判明し、発話時現在にはじめて新情報として告げ伝える意識の現われであると仮定する。こうしたIt turns out that節構文の主節動詞 “turn” の単純現在形の用法は、新聞記事見出しの現在、筋書きやト書きの劇的現在、歴史的現在の単純現在形の用法とは峻別される。次節では、It turns out that節構文の主節部に使用される単純現在形の用法を整理し、時間を隔てて判明した事実を新情報として発話時現在に披瀝する単純現在形の用法を同定する。

## 2. It turns out that節構文の主節部に使用される単純現在形

ここまで、It turns out that節構文の主節動詞 “turn” に単純現在形が用いられて過去の判明が伝達される言語現象が観察されることを指摘した。この言語現象は、英語において広く観察される新聞記事見出しの現在、筋書きやト書きの劇的現在、歴史的現在といっ

た単純現在形の用法とは峻別される。本節では、It turns out that節構文の主節に使用される単純現在形を概観し、本研究対象の単純現在形の用法と他の用法とを区別する。

まずは、It turns out that節構文の主節部に新聞記事見出しの現在、筋書きやト書きの劇的現在、歴史的現在の用法の単純現在形が用いられる用例を確認しておこう。

第一に、新聞記事の見出しにおいて、It turns out that節構文の主節部に単純現在形が使用される場合がある。Radden and Dirven (2007) は、新聞記事の見出しなどに用いられる現在時制を“summary present”（「要約の現在」）と呼び、緊急性や現実性を伝えると説明する。(10a-b) はいずれも新聞記事の見出しの用例である。

- (10) a. So It Turns Out That Channing Tatum Is a Pretty Good Actor  
(*The Atlantic*, 2013/2/3)  
(結局、Channing Tatumはなかなかよい俳優だということがわかる)
- b. It turns out that nothing bad will last forever, either  
(*Chicago Tribune*, 2008/1/6)  
(よくないことも永遠には続かないものだということがわかる)

第二に、筋書きやト書きにおいて、劇的現在を表す単純現在形がIt turns out that節構文の主節部に使用される場合がある。(11) は過去の出来事を伝える文脈ではなく、筋書きを伝える文脈でIt turns out that節構文の主節部に単純現在形が使用されている。

- (11) A has bought a pair of jeans of a well known brand in a store. Afterwards, it turns out that the jeans are actually pirate copies. Even though the shopkeeper offers to replace the fakes with a pair of jeans of the right brand, A may refuse this offer.  
(E. H. Hondius (ed.), *Principles of European Law on Sales*)  
(Aさんはある店で有名ブランドのジーンズを買った。後になって、実はそのジーンズが著作権侵害のコピー商品だとわかる。店主は正規ブランドのジーンズと偽造品とを交換することを提案する。しかし、Aさんはこの提案を断る可能性がある。)

第三に、歴史的現在を表す単純現在形がIt turns out that節構文の主節部に現れる場合がある。(12) のIt turns out that節構文には、過去の出来事があたかも眼前で起こっているかのように生き生きと描写する歴史的現在用法の単純現在形が主節部で使用されている。

- (12) When the first tiny green leaves start to bud in April, she first assumes them to be decorations that someone has hung on the bushes and trees. Sadly, it soon turns out that my new job is less than glamorous.  
(J. Maula, *The Jasmine Years: From My African Notebooks*)  
(4月にその最初の小さな緑の葉が芽を出し始めると、彼女はそれらが低木や高

木に誰かが掛けた飾り付けだとはじめは思う。残念なことに、私の新しい仕事は決して魅力的ではないとやがてわかる。)

上記の (10)-(12) の用例が示す単純現在形の用法はIt turns out that節構文に特有の用法ではなく、英語に広く観察される。しかし、It turns out that節構文の主節動詞 “turn” に単純現在形が用いられて過去の判明を表すとき、問題意識の発生から時間を隔てて判明した事実を新情報として発話時現在に告げ伝えるために現在時制が活用される事実注意到注意されたい。次例を観察しよう。

- (13) a. And it is only now, only after this burst of light, that the atmosphere that protects human life can be called a cloud; only now does it turn out that this atmosphere is opaque, that we can see nothing within it; this characteristic would have made no sense before.

(K. Michalski, *The Flame of Eternity: An Interpretation of Nietzsche's Thought*)  
(そして人間の生命を守る大気が雲と呼ばれるのはようやく今日になって、つまりこの閃光の後になってである。この大気が不透明であること、この中では何も見えないことがわかったのは今日になってであった。こうした特徴はこれまで理解されてはこなかったであろう。)

- b. “I was married to Jason for seven years and it turns out I knew almost nothing about him.” “And I considered him my friend for more than twenty years, and it turns out I knew almost nothing about him either.”

(J. Cresswell, *Suspect*)

(「私はJasonと7年間結婚していたけれども、彼のことをほとんど知らなかったことが今になってわかったんです。」「そして、20年以上も彼を友人だと思っていたのに、彼のことをほとんど知らなかったことも今になってようやくわかったんです。」)

(13a) では、副詞表現 “only now” (「今になって {ようやく/はじめて}」) が倒置を受けて文頭に現れ、事実の判明に至る過程の長さ、つまり「時間の隔たり」が積極的に表現されている。(13b) では、2つのIt turns out that節構文のいずれにも「時間を隔たり」を具体的に表す副詞表現 “for seven years”、“for more than twenty years” が先行し、話し手が7年間にも渡る結婚生活、20年以上にもわたる友人としての付き合いがあったにもかかわらず彼のことがほとんど理解できていなかった事実が「今になってようやく」新情報としてわかったことが伝達されている。

大竹 (2013) で論じたように、It turns out that節構文は、先行文脈や話題中のことからの実情や結末といった容易には知りたが事実が、調査や研究などの経緯や一定の時間を経て判明したことを表現する。It turns out that節構文の主節部に単純現在形が使用されるのは、問題意識の発生から時を隔てて事実が判明し、発話時現在に新情報としてはじめてつまびらかにする意識の現われであると考えられる。

### 3. It turns out that節構文に生起する「時間の隔たり」を表す副詞表現

真相や結末の判明を披瀝するIt turns out that節構文には、問題意識の発生から事実判明に至るまでの「時間を隔たり」の含みが常についてまわる。そうした「時間の隔たり」意識が単純現在形の使用と共にどのような形式で具現化されるのかを、It turns out that節構文に生起する副詞表現を観察しながら探ることにしたい。

まず、副詞表現“now”（「今になって」）が文頭に現れ、直後に「時間の隔たり」の長さを具体的に表す副詞表現が現れることがしばしばある。(14a-b)では“Now, over 40 years later,”（「40年以上が経ち、今になってようやく、」）、“Now, several decades later,”（「それから数十年経った今になって、」）という「時間の隔たり」の長さを具体的に表す副詞表現が現れている点に注意されたい。

- (14) a. Now, over 40 years later, it turns out that he was smarter than I thought – a common situation.

(M. Coffman, *Sports Medicine for Hunting Dogs*)

(40年以上が経ち、今になってようやく、思っていた以上に彼が賢かったことがわかったのだ。そういうことはよくあることだ。)

- b. As a sci-fi-loving child of the 60s and 70s, I believed that you could learn everything you needed to know about politics from watching the Planet of the Apes movies. Now, several decades later, it turns out that idea wasn't so crazy after all; [...].

(*The Observer*, 2013/3/3)

(60年代、70年代のSF好きの子供だった私は、映画「猿の惑星」を見れば政治について知っておくべきことが何でも学べると思っていました。それから数十年経った今になって、やはり、当時の考えはそれほど突拍子もない考えではなかったことがわかったんです。[...])

もちろん、副詞“now”を伴わずに「時間の隔たり」を表す表現が単独で生起する場合もある。(15a-c)では“later”、“subsequently”、“afterwards”（「後になって」）がIt turns out that節構文に生起して問題意識の発生から事実判明に至るまでの「時間の隔たり」を表している。

- (15) a. When Andrew arrives in Philippi, it becomes known to him that the petitioner holds two people captive (it later turns out that there are actually nine).

(W. Schneemelcher, R. M. Wilson (eds.), *New Testament Apocrypha*)

(AndrewがPhilippiに到着すると、原告が2人を監禁していることが彼に知れた（後になって、本当は9人いるということがわかった）。)

- b. Subsequently, it turns out that the mortgagee is unemployed and doesn't have a prayer of making the mortgage payments.

(C. T. Bouchard, J. V. Koch, *America for Sale: How the Foreign Pack Circed and*



*Devoured Esmark*)

(その後になって、抵当権者が解雇され、抵当を支払う見込みがないことが判明したのだ。)

- c. Afterwards it turns out that this feminist “outburst” had in fact caused Rei to neglect an important detail — that Mrs Chapman used her maiden name as a cover-up.

(J. Kuortti, *Writing Imagined Diasporas: South Asian Women Reshaping North American Identity*)

(後になって、この女性解放「暴動」は実はReiが重要な任務を怠ける原因となり、Chapman夫人がごまかすために結婚前の名前を用いていたことがわかったのだ。)

また、「時間の隔たり」を表す副詞“now”が“only”による限定を受けて「今になって |ようやく/はじめて|」といった意味を積極的に表現するIt turns out that節構文もしばしば観察される。

- (16) I guess I thought I was one of the lucky ones. Only now it turns out that I wasn't lucky, only ignorant. (P. Tangey, *Loving Richard Feynman*)

(私は自分が幸運な人間の一人だと思っていたと思います。今になってはじめて、私は幸運だったのではなく、ただの無知だったとわかったのです。)

Carter and McCarthy (2006) は、“only now” が文頭に現れるとき、形式ばった文脈では主語と動詞の倒置が起きると指摘している。

- (17) In formal contexts, when front-position *now* is preceded by *only*, subject-verb inversion occurs:

*Only now do I really understand what she meant.*

(at this moment and not before)

(Carter and McCarthy (2006))

Carter and McCarthy (2006) が挙げる (17) の用例 “Only now do I really understand what she meant.” は「今になってはじめて彼女の伝えたかったことが本当にわかった」という意味を表す。実際の言語資料を観察すると、副詞“now”や“subsequently”が“only”による修飾を受けて文頭に現れ、It turns out that節構文の主語と動詞が倒置されている例が確認できる。

- (18) a. Only now does it turn out that a transformation from system to system does not automatically entail moving from the Second to the First World, and may even bring a country closer to the Third than to the First World.

(G. W. Kołodko, *Globalization And Social Stress*)

(今になってようやく、体制を移行することは第二世界から第一世界に移行

することを自動的に含意せず、第一世界よりも第三世界に国家を近づけさえする可能性があるということがわかった。)

- b. Only subsequently (and so to speak by chance) does it turn out that this formula is precisely the one by which the proposition itself was expressed.

(R. R. R. Gill, *Deducibility and Decidability*)

(この公式が定理自体が表されたものとまったく同じであることがわかったのはその後になって(そしていわば偶然に)であった。)

さて、It turns out that節構文の主節部が表す「判明」自体は瞬間的な出来事である。It turns out that節構文が伝達する判明が瞬間的な出来事であることは、次例で“all of a sudden”や“suddenly”(「突然」)が生起していることから明らかである。

- (19) a. Three years we've been together, sharing the hassles, and building this place up into a well known craft centre. Now, all of a sudden, it turns out we don't know you at all. (D. James, *Heart of Glass*)

(3年間、私たちは一緒に力を合わせ、苦労を分かち合い、工芸館を開館して有名にしてきました。ところが今になって突然、あなたのことをまったく知らなかったということがわかったのです。)

- b. They got used to the idea that they could do anything with impunity and now all of a sudden it turns out that they can't.

(Human Rights Watch, *Rights Denied: The Roma of Hungary*)

(彼らは刑罰を免れて何でもできるという考えに慣れていた。しかし今になって、自分たちがそうすることができないことが突然わかったのだ。)

- c. “Well, all I know is it's been my land for twenty-five years and now all of a sudden it turns out that it was all mined and nobody ever told me, and I had to find it out by myself stumbling over a tunnel.”

(H. Wouk, *Youngblood Hawke*)

(「ええと、私が知っていることといえばその土地は25年間自分の所有地だったということだけです。そして、今になって突然わかったのですが、その土地はすっかり坑道が掘られていて、結局、誰も私に教えてはくれず、坑道をよるめいて歩きながら自分で探り調べなければならなかったんです。)」

- d. Much of this information on economic categories has been in White Papers successively not over all that time, but over many years, and now suddenly it turns out that all that effort that went into those White Papers was spurious.

(Great Britain, Parliament, House of Commons, *Papers by Command Volume 34*)

(経済の範疇のこうした情報の多くは当時ずっとではないが、何年にも渡り連続して白書に掲載されてきた。しかし、今になって突然、白書に記載された当時の記載すべてが偽りであったことが判明したのである。)

さて、It turns out that節構文にしばしば生起し、「今になって」という意味を伝える“now”や「後になって」という意味を伝える“later”は、“understand”や“see”といった認識や理解を表す動詞の単純現在形とも共起する。

- (20) a. “I understand now that you were just doing your job,” Jesse explained. “You understand now,” Tykas repeated. Jesse grinned and nodded sheepishly. “Until just a few days ago, I didn’t know that Emily had run away from home. I didn’t even know that she was Franklin Austin’s daughter. I thought her name was Barnes.”

(J. Cavanaugh, *The Pioneers*)

(「あなたは自分の役目をただ果たしていただけだったということが今になって私にはわかりました。」とJesseが釈明した。「今にしてようやくわかったんですね。」とTykasが繰り返した。Jesseはにっこり笑い、恥ずかしげになづいた。「ほんの数日前までは、Emilyが家出をしたことを知りませんでした。彼女がFranklin Austinの娘だということさえ知りませんでした。彼女の名前はBarnesだと思っていたんです。)」

- b. And now, many years later, I see that I have been cooking “resentment stew” for far too long.

(S. Gaynor, *Creative Awakenings: Envisioning the Life of Your Dreams Through Art*)

(そして、何年もたった今になって、あまりにも長い間、自分が「敵意の心」をふつふつと煮え立たせていたことがわかったのです。)

- c. Decades later, I understand her upset about losing her costly cotton sheets.

(M. Levine, *The Price of Privilege*)

(数十年たって、高いコットンシーツをなくしてしまったことに彼女が動揺したことがわかったのだ。)

また、英和辞典の“now”（「今になって」）の項にも“see”や“understand”との共起例が引き合いに出されている。(21a)の『ランダムハウス英和大辞典』第2版では“see”が、(21b)『プログレッシブ英和中辞典』第3版では“understand”が用例として提示されている。

- (21) a. 現在では、今日では、現状では、今になって  
I see now what you meant. (今になって君が言おうとしていたことが分かる。)  
(『ランダムハウス英和大辞典』第2版)
- b. 今になって、現状では  
I understand now why you were angry. (君がなぜ怒っていたのか、今になってわかる。)  
(『プログレッシブ英和中辞典』第3版)

*Oxford English Dictionary*, Second Editionはこうした用法の“now”を(22)のように“Under the present circumstances; in view of these facts”（「積み重なる事情を鑑みたり、事実

を踏まえると])と定義し、経緯や一定の時間を経たことを合図する“now”に言及している。

(22) now

I. *adv.* 1. b. Under the present circumstances; in view of these facts.

(*Oxford English Dictionary*, Second Edition)

本研究の考察対象であるIt turns out that節構文と、(20)-(21)の“see”や“understand”を伴う構文は、いずれも過去に「わかった」ことを披瀝するのに単純現在形が用いられる点、「今になって」という意味を表す“now”としばしば共起する点で類似している。たしかに、It turns out that節構文はthat節内の情報が新事実として世間や社会に明らかになったことを披瀝する一方、“see”や“understand”を伴う構文は主語の指示対象がthat節内の情報を理解に取り込んだことを表明するという違いはある。しかしながら、いずれの構文も発話の背後には、問題意識の発生から時間を隔てて判明や理解に至り、発話時現在に披瀝するといった話し手の意識が潜在しており、共通点と相違点の解明は今後の研究課題である。It turns out that節構文とは異なり、“see”や“understand”の単純現在形の用法については、先行研究において考察が加えられている。たとえば、Quirk et al. (1985)は、“say”や“tell”といった「伝達動詞 (verbs of communication)」や、“understand”、“hear”、“learn”といった伝達過程の受信の結果を表す動詞には、過去を表す現在時制の用法があることを指摘している。Huddleston and Pullum (2002)は、「根拠を伝える伝達動詞の過去用法」として“say”、“tell”、“inform”、“hear”、“gather”、“understand”を伝達動詞として取り上げている。Huddleston and Pullum (2002)は、“tell”や“hear”を伴う構文の主節で過去の伝達行為が現在時制で表現されるのは、従属節の情報内容を積極的に伝えようと、その情報内容を信じる根拠、受け入れる根拠を背景知識として示すためであると説明している。Swan (2005)は、「I hear (that) ... and I see (that) ... の現在時制形は聞いたり、読んだり、テレビで見たばかりのニュースを紹介するのにしばしば用いられ」、「これと同様に用いられる他の動詞もある。しばしば用いられる例は、“understand”と“gather”である。これらは情報を確認するためにしばしば用いられる」と説明を試みている。また、Wierzbicka (2006)は、一人称単数現在形“I {think / guess / suppose / believe / understand / suspect}”などを“epistemic phrase”と呼び、その意味論的特性を論じている。しかしながら、Quirk et al. (1985)、Huddleston and Pullum (2002)、Swan (2005)、Wierzbicka (2006)はいずれも本研究の考察対象であるIt turns out that節構文の主節動詞の単純現在形の用法についてはまったく言及していない。さらに、過去の判明や理解を単純現在形で伝達する現象は、大竹 (2009)で詳述した(23)のS take it that節構文でも確認されている。

(23) Thank you for permission to visit Julia — I take it that silence means consent.

(J. Webster, *Daddy-Long-Legs*: 大竹 (2009))

(Julia のところへ行くことをお許しいただきありがとうございます。お返事がないということは承諾されたのですね。)

(23) のS take it that節構文は、「の(だ)」構文に対応する英語構文のひとつとして大竹(2009)で取り上げ、すでに獲得している情報を理解に取り込み確定する過程を開示する構文であることを明らかにした。このS take it that節構文の主節動詞にも単純現在形がしばしば用いられる。It turns out that節構文とこれらの構文の主節部に単純現在形が使用されるメカニズムの普遍性と個別性の究明については今後の研究課題としたい。

#### 4. まとめ

It turns out that節構文は、先行文脈や話題中のことがらの実情や結末といった容易には知りたい事実が、調査や研究などの経緯や一定の時間を経て明らかになったことを伝える。It turns out that節構文の特徴のひとつは、判明時が過去であるにもかかわらず、主節動詞“turn”にしばしば単純現在形が使用されるところにある。判明は問題意識のないところからは生じ得ない。そのため、判明を伝達するIt turns out that節構文には問題意識の発生から事実の判明に至るまでの「時間の隔たり」が必然的に含意され、その判明内容は発話時現在においてはじめて新情報として披瀝される。本研究では、It turns out that節構文が過去の判明を伝達するときしばしば主節動詞“turn”に単純現在形が用いられる言語現象を考察し、判明までの時間の隔たりを表明し、判明内容を発話時現在に新情報として披瀝するという意識の具現化の視点から説明した。

\*本研究は、平成24-26年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号24520534「日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出沒の普遍性と個別性に関する総合的研究」(研究代表者:大竹芳夫)の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 安藤貞夫(2005)『現代英文法講義』東京:開拓社。
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *The Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University of Press.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大竹芳夫(2009)『「の(だ)」に対応する英語の構文』東京:くろしお出版。
- 大竹芳夫(2013)「S+turn+out(+to+be+that)節構文の主語要素の選択と出沒に関する意味論的研究」『言語の普遍性と個別性』第4号, pp.1-25. 新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*. Amsterdam and

Philadelphia: John Benjamins.

Sinclair, John (2004) *Collins COBUILD English Usage for Learners*. Second Edition. Glasgow: HarperCollins Publishers.

Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*. Third Edition. Oxford: Oxford University Press.

Wierzbicka, Anna (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford: Oxford University Press.

## 辞書

『ウィズダム英和辞典』第3版(2012) 東京：三省堂.

『プログレッシブ英和中辞典』第3版(1997) 東京：小学館.

『ランダムハウス英和大辞典』第2版(1993) 東京：小学館.

*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. Third Edition. (2008) Cambridge: Cambridge University Press.

*Collins COBUILD Advanced Dictionary*. (2009) Boston, MA: Heinle Cengage Learning.

*Oxford Advanced Learner's Dictionary*. Eighth Edition. (2011) Oxford: Oxford University Press.

*Oxford English Dictionary*. Second Edition. (1989) Oxford: Oxford University Press.